

令和元年6月14日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K20896

研究課題名(和文) 多様化する競争的資金配分制度に関する評価論的研究

研究課題名(英文) Evaluative Study on Diversified Grant Peer Review

研究代表者

西村 君平(NISHIMURA, Kunpei)

東北大学・理学研究科・特任講師

研究者番号：50757466

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：競争的資金配分制度の基礎をなす研究評価の基本的な枠組みについて、評価の一般モデルに基づく分析を行った。評価の一般モデルについては、評価基準の蓋然性に着目した論文を執筆した。評価の一般モデルの観点から、大学教員や大学院生に対するインタビュー調査を実施し、大学教育・大学院教育を改善するツール(ループリック)開発を進めるなど、研究評価に関する知見と大学教育に関する知見の融合を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の眼目であった研究評価に関する知見と大学教育に関する知見の融合を図り、大学生・大学院生に対する専門職的社会的化を促すキャリア教育プログラムや大学生・大学院生のサイエンスリテラシー育成用教材を開発するなど、学術的に新規な枠組みを、実践的な教育開発につなげた点に意義がある。ただし、申請課題終了時点では、この知見が高等教育研究の実践的文脈においてのみ発表されるに留まっている点で課題を有する。

研究成果の概要(英文)：In this study, the basic framework for research evaluation underlying the competitive funding system was analyzed based on a general model of evaluation. As for the general model of evaluation, I wrote a paper focusing on the probability of the evaluation criteria. From the viewpoint of the general model, I conducted topic surveys for university faculty and graduate students, and construct a tool for university education and graduate education.

研究分野：高等教育

キーワード：評価 研究評価 政策評価

1. 研究開始当初の背景

科学技術の社会経済的インパクトが強くなるにつれて、研究に対する社会的関心が高まり、研究者の自由な発想に基づく学術研究（ボトムアップ志向）に加えて、政策課題対応型の研究開発（トップダウン志向）が重要視されるようになっている（島 2005）。そして研究の多様化に従って、研究評価、特に競争的資金配分制度が多様化している（表 1）。

伝統的に研究評価はピアレビュー方式（評価対象となる研究論文や研究計画の著者と同程度以上の専門性を持つものが、評価者を務める）を採ってきたが、ここに政治家や企業経営者といった、有識者が評価に参画する動きが加速している。

この動きは、社会に開かれた新しい研究評価と評されることもある（Fredericsen et.al. 2003）。しかし、一方で、アクターの多様化が評価のマイクロポリティクス化を惹起することも危惧されている。この危惧が顕在化した典型例が、2009年に我が国で行われた行政刷新会議（事業仕分け）である。事業仕分けでは一部の研究についても政治家主導で評価が下されたが、結果的に、大きな混乱を招き、有識者の科学リテラシーの問題や研究者の社会経済的な価値に対する感性の欠如等を浮き彫りにした事例として、世界に知られることになった（Nature 2009）。

	ピアレビュー	パネル(専門家)レビュー	
形式	学会のレフリー制度	ボトムアップ型の競争的資金	トップダウン型の競争的資金
評価主体	同僚研究者	シニア研究者・有識者等	
評価対象	研究論文	研究計画等	研究機関・機関経営等

2. 研究の目的

多様化する競争的資金配分制度の実態に鑑みると、誰が、どのような資格で、どのようにして研究費の配分を決定するのか、改めて考えなおすべき時に来ている。しかし、競争的資金配分制度については財政学的研究が主で、審査体制・手法（＝評価方法）の特徴を明らかにし、その改善に資するような研究は進展が遅れている。このまま評価方法論に関する知的空白が続けば、我が国を舞台として、再び拙速な評価が行われることにもつながりかねない。

そこで本申請課題では多様化する競争的資金配分制度の実態を明らかにするために、競争的資金配分の評価方法に関する事例研究を行ったうえで、競争的資金配分制度の全体像を俯瞰する理論的分類を構築する。これによりプログラム単位（実践）とシステム単位（制度）の2つのレベルで、評価の実態を明らかにする。これにより、現行の評価の方法論的な強み・弱みを明らかにし、評価の実践および制度を省察・改善するための知的基盤を築く。

申請者は、これまでに大学教育改革の実務の一端を担い、特に大学教育における教育評価についての理論的・実践的な研究を行っている。このことに鑑みて、「評価論の応用」という意味で、研究評価と教育評価・学習評価の双方を並行的に研究し、評価論に対する多角的な理解を醸成することをもう一つの目的とする。

3. 研究の方法

本研究が採用する研究方法は半構造化インタビューによる事例調査である。ただし、調査で得

られた知見を、大学院や大学教育における教育プログラム等に応用することを企図しており、この意味ではより実践的なアクションリサーチの考え方を研究方法に取り入れている。

具体的な手続きとしては、大きく以下の3ステップを採った。

- A. 競争的資金配分制度の分析に関する基礎的な事実の収集と整理
- B. 評価の一般モデルの構築とそれに基づくインタビュー
- C. 評価論の観点から見た実践的・政策的インプリケーションの導出

このうちAについては、学会等で実施しているレフリー制度についても調査対象とする。また、評価の一般モデルに基づくインタビュー調査は、科研等の国の競争的資金配分制度を主な対象とする。なお、競争的資金配分制度の多様化の中で、科学技術振興機構等による研究開発型・プロジェクト型の資金配分制度が増加していることに鑑みて、対象とした事業の範囲は、多様性を掬い上げられるように、可能な限り幅広くとることとした。

4. 研究成果

・評価の一般モデルの構築

従来、評価論では、専門職的な評価は「評価基準を設定し、パフォーマンスを測定し、基準とパフォーマンスを総合して、対象の価値を明らかにする行為」(技術)と認知されてきた。

しかし評価論の進展の中で、評価が社会的文脈に大きく影響を受けることが明らかになった(Patton 2013)。近年では、評価と社会的文脈の関係についての研究が進み、専門職的な評価は「評価者が、自らの専門職的制度基盤(ガイドラインやナレッジベース・専門家間の相互批評等)を踏まえて、社会的に堅固(socially robust)な基準を設定し、それを用いてパフォーマンスを測定し、評価対象の価値を明らかにする行為」といったように、評価過程における社会的要素が重視されるようになり、評価の一般モデルが改定されている。これを踏まえて、本申請課題では評価実態を「基準設定」・「パフォーマンス測定」・「評価者の専門職的制度基盤」という3変数で体系的・構造的に捉える枠組みを構築した。

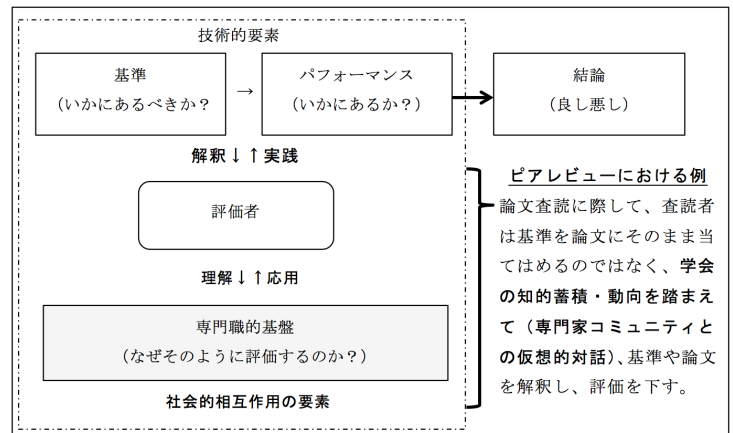


図1：評価論の最新動向を踏まえた評価の一般モデル

・評価者・被評価者に対するインタビュー調査

研究がプロジェクトとして(相対的に)構造化されやすい自然科学・社会科学分野の研究者、逆に構造化し得ない人文学分野の研究者に対して、研究評価に関するインタビュー調査を行った。

調査の結果、研究のプロジェクトとしての構造化は、申請書の作成や評価の明確さに影響を与えているもののその影響は限定的であり、構造化とは無関係に、評価にあたっては、単に申請そのものを評価の対象とするのではなく、申請を取り巻く社会的・学術的背景について独自の観点から検討したり、近年の研究動向を鑑みて申請課題の価値を熟考するなど、定性的な価値判断を行っていることが示唆された。また、定性的な価値判断は、評価者個人の独断によるものではなく、これまでの研究(専門)職としての経験や学会の動向等の専門職的制度基盤

に依拠したものであり、いわば「訓練された主観」(Erikson)や研究者に求められる暗黙知の一つである「創造的想像力」(Polányi)というべき実践的な認識枠組みに即したものであることが示唆された。

・教育プログラムへの応用、汎用的な政策評価の方法論へ

インタビュー調査を通して示唆された研究評価の複雑性を踏まえて、単に研究評価のコンピテンシーを高めるプログラムを試験的に開発し、所属大学において実施、評価した。

具体的には、大学生が(自分あるいは他の人の手による)研究成果を評価するときに、論文や申請書を論理性等の技術的観点からのみ評価するのではなく、それを取り巻く学術的・社会的背景を省察しながら評価するようになるためのトレーニングプログラムを実施した。また、より初学者のための教材として、文書の読解や精読の際に、文書の字義のみならずその背景等を踏まえて内容を批判的に吟味する練習を行うアクティブラーニング用教材を開発した。

また、評価の一般理論の確立への寄与という観点から、研究の後半では研究評価や教育評価のみならず政策評価についても、評価の一般モデルの考えを応用し、論文等を発表した。

5. 主な発表論文等(研究代表者は下線)

[雑誌論文](計 6件)

呉書雅・島一則・西村君平，2019，「日本学生支援機構貸与型奨学金の受給が生活時間に与える影響—傾向スコアマッチングによる検証」『高等教育研究』22。(査読あり)

呉書雅・島一則・西村君平，2019，「日本学生支援機構貸与型奨学金が大学生の収入・支出に与える影響—プロペンシティブスコアマッチングによる検証」『生活経済学研究』49: 57-73。(査読あり)

西村君平・工藤祐介・小寺将太(2017)「共育型地域インターンシップのモデル構築—田舎館村における事例研究を通して—」弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター編『教養教育開発実践ジャーナル』第1巻、71-84頁、査読あり。

島山祐将・会津瑞樹・西村君平(2017)「学生提案型地域プロジェクト学修の構想-学生主体の教育実践のマネジメントの可能性-」弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター編『教養教育開発実践ジャーナル』第1巻、85-96頁、査読あり。

林透・眞鍋和博・猪俣歳之・岩瀬峰代・西村君平・山下貴弘(2017)「地域連携学習の設計・運用・評価とその担い手のあり方について考える」日本大学教育学会編『大学教育学会誌』第39巻第2号、110-114頁、査読あり。

西村君平(2016)「問題解決学習を通じた実践的思考様式の涵養—地域教育プロジェクト実践報告—」弘前大学21世紀教育センター編『21世紀教育フォーラム』第11巻、1-9頁、査読あり。

[学会発表](計 2件)

西村君平(2017)「地域をフィールドにした共育型インターンシップ」第39回大学教育学会(広島大学)

西村君平(2016)「ループリックを大学に埋め込む」第38回大学教育学会(立命館大学)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕 該当なし

〔その他〕 該当なし

6. 研究組織

本研究(若手B)については、申請者個人で行ったものである。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。